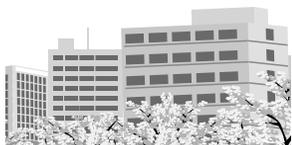


会員の広場



「ゲニウスロキ(地の精霊)の国」 ポーランドにて

夏目敏夫(東京)

POLSK(ポーランド)は、遙けき国である。ワルシャワ発、モスクワ行き列車に乗る。北京帰りの女子学生と迎えの母、バレーを志す青年と同室、二人とも英語はスキル、彼らの日本への関心度は高く、クールジャパン的話題で盛り上がった。古都クラクワに着く。

折にふれ話し合った人々の物腰・対応に焦らないが何事にも屈しない気迫を感じた。国なき民として欧州を放浪するうちに、コスモポリタンの気質を備えた、さらにモンゴル、イスラムを破った軍事・戦術能力は有能な将校団として各国で重用された。米国の士官学校ウエストポイント、なんとポーランドの将軍によって創設されたもので、米軍将校にはポーランド系が多いと仄聞する。

旧都の城塞は鞏固、壮大、世界遺産としても一級、城下のヴィスワ河畔の日本美術・技術・マンガセンター。彼らの日本への憧憬の象徴である収蔵品に幻の写楽の浮世絵が発見されている。第一次大戦当時、同国系難民救済に尽くした日本の善意は人々の語り草にな

っていた。城壁近く、30分置きに火を噴く伝説のドラゴン像、「ゴジラ」と叫んで微笑を送ってきた。チャルトスキ美術館で待望のダヴィンチの「白貂を抱く貴婦人」に会えた。「モナリザ」より人間味があり、清らかな色気に心が動いた。寒い国の暖かさがある。

アウシュヴィッツは、暗雲低迷、冷たい雨の中に灰色の影を落とす。凍って光るレール、その先に望楼門が佇んでいた。陰々滅滅とはこのことか。死の世界のような各棟を巡る。日本人ガイド、中谷氏の説明を聴く。ナチズム第三帝国の支配下、ここで殺戮されたユダヤ人達、携わったドイツ人達も突出した狂乱のヒットラーとその輩下の行動システムに組み込まれた人々である。遺品の山々、殺人ガ

ス装置、筆舌に尽くし難い人間の持つ劣性の劫を感じた。次いでヴェリチカ岩塩坑に行く。有史前から発掘されて来たが、今は観光資源になっている。500^{メートル}近くを降りると発掘跡の大洞窟、教会、音楽ホール、黒い鏡のような池、隧道を進むと塩の鍾乳洞、億年単位の美観、食卓塩やら金属ナトリウム化したクロス・ペンダントと土産品も揃っている。

再びワルシャワへ。首都は破壊された建物の修復を終え、新市街は近代化が進んでいる。その中に旧ソ連の遺物、文化宮殿が聳える。時代の流れを感じる。この国は「琥珀」が名産。「フォーエバーアンバー」、懐かしい映画がある。琥珀よ永遠に。そしてポーランドよ永遠に。シヨパンの栄光を。